

(曾於郡志布志町内之倉字片野)

位置と環境

本遺跡は町の中心部から北に約11km離れた町道中川内線と林道中川内27号支線が、交差する地点の北側の谷に位置している。遺跡地は南向き斜面に開口した標高約100mの水蝕洞穴内にある。

調査の経緯

発掘調査は志布志町誌編纂事業の一環として、志布志町教育委員会が調査主体となり、昭和39年（西暦1964年）に発掘調査が実施された。

遺構と遺物

調査の結果、縄文時代前期・後期・晩期、弥生時代前期・中期、歴史時代の複合遺跡であり、遺構や遺物などを発見した。

縄文時代前期の遺物は、轟Ⅰ式・轟Ⅱ式・轟Ⅲ式・轟Ⅳ式・曾畑式等の土器が出土した。

また、同時期の敷石住居跡（轟式期）が検出されている。

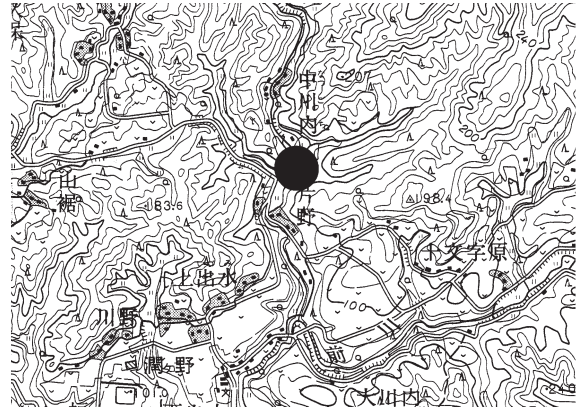
縄文時代後期の遺物は、釣針（第2図1）・カンザシ（第2図2・3）等の骨角器をはじめ、岩崎式・市来式・西平式（第3図11・12）・草野式・御領式（第3図14）等の土器をはじめ、イノシシ・シカ・ツキノワグマ・イヌ・タヌキ・アナグマ・ノウサギ・ムササビ・サル・キジ等の獣骨、アワビ・二枚貝・巻貝・カキ・カワナナ・タニシ等の貝類も出土している。

また、同時期の遺構で岩棚を利用したと考えられる住居跡（西平式期）や、排水用の溝を検出した。

縄文時代晩期の遺物は、黒川式・夜臼式等の土器が出土した。

縄文時代の前期の土器は轟Ⅲ式土器（第3図7）と曾畑式土器（第3図8・9）が共伴したことが注目されている。

轟式土器は格子状文や曲線文等を施す轟Ⅰ式（第3図4・5）、みみずばれ状の隆起帯文の貼付が認められる轟Ⅱ式（第3図6）、貼付隆起帯文に刻み目を施し連点文等が施文される轟Ⅲ式（第3図7）、連続した弧文等の組み合わせが認められる轟Ⅳ式



第1図 片野洞穴の位置

（第3図10）など層位的に4分類されている。

一般的に、洞穴遺跡は地層の堆積が良好であるために、遺物・遺構等の層位的な位置づけが可能となり、土器の編年等に好条件な環境である。

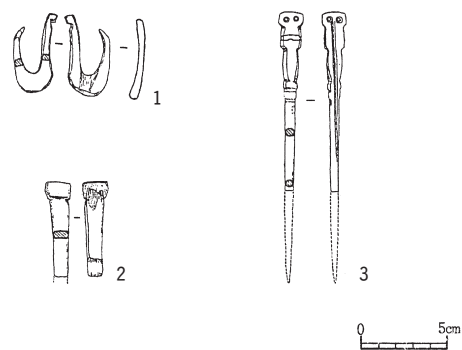
この点において、轟式土器の細分と曾畑式土器の位置づけが明確になったことは大きな成果と言える。獣骨や貝類が多量に出土したことにより、当時の食生活を窺い知るうえで貴重な資料を提供することとなった。特に、獣骨の中でイノシシ・シカが最も多く出土していることも判明し、貝類は淡水産（1割）のものは極端に少なく、海水産（9割）がほとんどであった。このことから、地理的に海に遠いにも関わらず、海との関わりが深かったことを証明することとなった。

特徴

洞穴遺跡における、層位的な学術調査の実施により、轟式土器の細分と曾畑式土器の位置づけが明確となった。

資料の所在

出土遺物は、志布志町教育委員会に保管されている。



第2図 出土遺物

る。

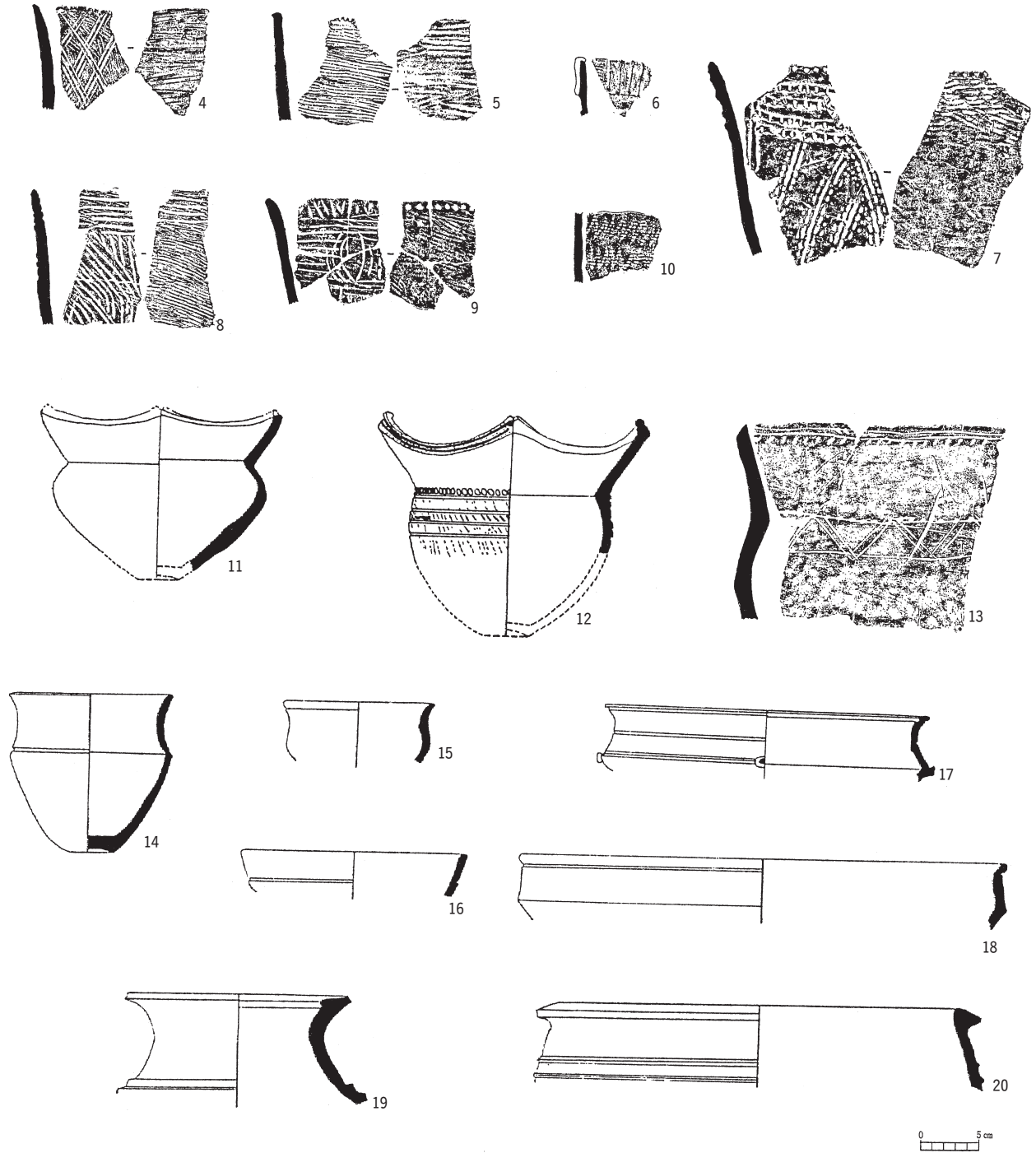
参考文献

河口貞徳1967「片野洞穴」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会

志布志町1979『志布志町誌』

河口貞徳1985「片野洞穴」『鹿児島考古』第19号鹿児島県考古学会

(小村美義)



第3図 出土遺物